道標

社会の将来見据える

移民受け入れ国の魅力

村川　庸子
敬愛大国際学部教授

20年近く前、アメリカで研究者仲間2人と太平洋戦争当時の日系人強制収容所の跡地を訪ねる旅をしました。飛行機とレンタカーを乗り継いで2週間掛け、北カリフォルニアを皮切りにユタ州、ワイオミング州、コロラド州、アリゾナ州から南部のアーカンソー州までを巡りました。最も驚いたのは、有色人種をほとんど見かけない地域が思ったよりも多いことでした。

1990年当時のアメリカの人種構成は白人80%、黒人12%、アジア人3%といったところです。比較的多様な人種の人々が住むカリフォルニア州は白人が69%に過ぎませんが、ユタ州では94%近くが白人でした。いずれの州も農村部に至っては白人がほぼ100%で、大半の人々は一生をその地で過ごし、たまに都会に出たり、進学や就職で都会に移り住んだりして異文化に出合うだけでした。

それでは大都市は、常に異文化に接する状況にあるのでしょうか。ニューヨークには中国人、イタリア人、ロシア人やプエルトリコ人などが作り上げるエスニック・コミュニティーがあります。チャイナタウンでは英語を話せない人が今も大勢暮らしています。多民族国家にいても、異文化と接することなく遠く離れた母国の文化を礎にして暮らしている人も多いのです。

移民の多い国では文化や価値観の違いから激しい対立が生まれることがあります。貧しい移民は社会の負担にもなります。そんなことは百も承知で、アメリカが受け入れを続けてきたのは、移民が経済の大きな原動力になることを知っていたからです。

「人はそこにいるだけで、他の人の仕事を生み出す」と言われます。不法入国者の子どもの教育に税金が支出されることにさえ、将来のアメリカ社会への投資だという主張がなされます。

多民族国家アメリカと比べれば日本は人種や民族の同質性が高い国で、外国人労働者の受け入れを躊躇してきたのも無理からぬところがあると思います。高度成長期には労働力不足を女性の社会進出などで補い、移民を受け入れることなく切り抜けました。最近はさまざまな国の人を身近に見かけるようになりましたが、それでもアメリカの人種の多様性には遠く及びません。

しかし、少子高齢化の急速な進展は国の経済的な衰退につながります。このため、いずれ日本も徐々に移民の受け入れにかじを切っていくだろうと思い、その時には移民の価値を認めつつ多くの社会的問題を克服してきたアメリカに学ぶところが大きいと考えてきました。

バブル崩壊後でさえも多くの外国人が日本で職に就くことを夢見てきました。経済をはじめとする吸引力が日本にあるからです。そこに影を落としたのが東日本大震災と福島第1原発事故です。経済は不安要因を抱え、訪日観光客の落ち込みから分かるように日本を敬遠する風潮が海外にうかがえます。今後、日本は魅力的な国に再生できるのか。一抹の不安を覚えながらも、前を向いて歩くしかありません。

（むらかわ・ようこ、今治市出身）

ふるさと伝言

2011.7.17